

2026年度

国語

(時間……………60分)
(配点……………100点)

1

次の設問に答えよ。解答は、解答用紙にマークすること。

- (1) 空欄 を補うのに適切なものをそれぞれ一つ選べ。
- ① 大器 成 1
- ア 朝 イ 晩 ウ 早 エ 遅
- ② 賢 剛健 2
- ア 実 イ 素 ウ 日 エ 石
- (2) 傍線部のカタカナを漢字に直したときの部首を一つ選べ。
- 害虫のウ除根に有効な薬剤だ。
- ア うまへん イ しめすへん
ウ こもへん エ ぎょうにんべん
- (3) 「傑作」と熟語の組み合わせが同じものを一つ選べ。
- ア 師弟 イ 補欠 ウ 優秀 エ 赤飯
- (4) 音読み+訓読みの読み方を示す熟語を一つ選べ。
- ア 時間 イ 日線 ウ 銘柄 エ 雨音
- (5) 「去る者は日々疎し」の意味としてもっとも適切なものを選べ。
- ア 遠距離にいる者同士が互いを知るのには難しいということ
イ 親しかった者も遠く離れたら忘れがちなということ
ウ ものごとに興味のないふりをする人のこと
エ いったん故郷から離れると簡単に戻れないということ
- (6) 「互角を開く」の意味としてもっとも適切なものを選べ。
- ア 恥をかかせること
イ 世間知り合いが多いこと
ウ 心事がなくなるとはっと大顔つきになること
エ 相手に対して敬意を払うこと
- (7) 傍線部の中で種類が異なるものを一つ選べ。
- ア 眠いのに眠れない。
イ 急な知らせに驚いた。
ウ 工事の騒音に悩まされた。
エ 髪が風になびく。
- (8) 井上靖の作ではないものを一つ選べ。
- ア しらばんは イ あすなろ物語
ウ 天平の愛 エ 蜘蛛の糸

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
- 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、と表示のある問いに対してウと解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄のウにマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄									
10	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ

- 解答を始める前に、解答用紙の座席番号欄に座席番号を記入し、マークしなさい。また、氏名も書きなさい。解答科目欄には解答する科目をマークしなさい(解答科目欄のマークを間違えた場合、0点となるのでよく確かめてマークすること)。

2

次の文章を読んで後の設問に答えよ。解答は、解答用紙にマークすること。

ホップズは人間の欲望には限度がなく、何が得られればすぐに次の欲望が現れ、それが死、つまりは生命体の運動の終わりでつくと考えていた。だがこんなふうに言うとしても、彼にはこのことを非難する気はないのだ。生命という力を得て運動をはじめた人間が、障害を避けながら生命の保存と充実を望むことは、悪いことでも何でもなく、それはまさに運動体としての人間の「自然」なのだ。ホップズはやはりなんというか、「善悪の彼岸」に立って、よいわるいの同とう側から人間を捉えた人なのだ。

このことからホップズが、どんな人間であっても等しく追求するのが当然の最も重要なこと「A」な事柄として、「自己保存」を置く理由が分かる。運動体が運動をつづけるのは自然なことから、人間が自己を生き生きと保ち、その生命と力を持続させようとするのが当然なのだ。

生々しい諸力のぶつかり合いからいかに秩序が生まれるかを説明する際、ホップズは「石が下」の大きな謎を残した。それは「○世紀に、パーソンズ(Talbot Parsons, 1902-1979)によって「ホップズ問題」と名づけられたものだ。以下では、ホップズが秩序を再構成する手際を見ていながら、ホップズ問題の所在を明らかにしたい。

ホップズは、人間が自己保存を最重要視するのは当然だと言っている。彼のこの自明性を、「石が下」に落ちるようなもの(「市民論」と表現している。人間が死と苦痛を避けようとするのは、石が落下するのと同じように自然なことなのだ。そのためそれは「自然権」と呼ばれる。

「お前おれの消しゴム取ったぞ」と怒鳴る。怒鳴られた方は、「取ってないぞ。落ちてたんだ。それもだいたいお前のことだ」と言う。「そんなはずない。落ちてないぞ。取ったんだ。拾ったんだ。それは悪いことを使ってるとか、もとはお前のものでは今はほくのだ。ここで力の強いか弱いかをガツとなくって有無を言わず消しゴムを自分のものにして、それは力が支配する自然状態ということになる。

(○)に先生がやってきてけんかをやめさせ、それぞれの言い分を聞いて裁定を試みる。そうなることは、上に立つ権威によって当事者双方が言うことをまかされるわけだから、自然状態を脱して法的強制力を発揮する政治社会が形成されたことになる。

こうした例はいくつも挙げることができる。たとえばホップズは、当時の国際秩序を国家間の自然状態とみなしていた。彼は、そのころのヨーロッパには国際法に実効性を持たせる機関が存在しておらず、主権国家を超越する権力がなかった。そして、何一命令できない法廷を意味をなさない。国際関係は自然状態、つまり諸国家の争いの状態にあるのだ。

ホップズは、自然状態においてはあらゆる権利がすべての人のものであることを強調している。というよりも、上位の法も支配者も不在なのだから、誰もが自分の好きなように行なうことができる。何をやって公的に認められることも、罰を受けることもない。これがホップズによる、あらゆるものに對する権利である。人はこの意味で「C」な自由と権利の人にある。

ところがこの自由がもたらすものはとても少ない。というのは、たとえ何をしてもよくても、自然状態では人が実際にできることは限られているからだ。動くボールに見立てられた人は、いつどこから別のボールがぶつかってくるかわからない。そのため命がけで手に入れたものを奪われるの

自然は分かつて、なぜこれが権利なのか。ホップズにとって、権利とは自分の判断でしようを決めた(意志した)ことをする自由だ。分かつていくが、やりたいことをやれるのが権利と言われればなるほどだ。これを自然に当てはめると、自然権とは生きるために自己の判断に基づいて自分の力を好きなように使うことだ。

^b「自然権の定義が、「自然状態」にながらっている。それその人が生き残るために好きなように力を使おう、そして彼らの力を調整したり抑制したりする上位の存在がないなら、自己保存を賭けて人々が争う可能性が出てくる。

ホップズが自然状態を「万人の万人に対する闘争」の状態としているのはこのためだ。人は他人の生命も含めて、自己保存に役立つあらゆるものを利用してよい。他人が持っているものを奪ってもいいし、必要なら殺してしまってもいいのだ。

もちろん、むやみに人を騙し、オトシイ、暴行を加え、あるいは殺してしまおうことを、ホップズが賞賛しているわけではない。このあたりは、君主に堂々と裏切りを薦めるマキャヴェリとはかなり違っている。自然状態の下でも、ひとことひとこといし、しようしないことはよろしくないのだ。だが結局、よろしくないことをしてしまおう人が出てきたときに、はたしてその人を止められるかが問題だ。自然状態では、自分の力または「B」な同盟によって問題人物の行為を力で阻止することでしか、誰もそれを止められない。上に立つ権力がなく、また強制力を伴う法もないので、不正をただせる機関が存在しないからだ。

子どものけんかを例にとろう。一人の子が別の子の筆箱の中に、失くしたと思った自分の消しゴムが入っているのを見つけた。その子はもう一人

ではないかと、辱め敢もつねに警戒していなければならないのだ。

ホップズは自然状態を次のように描いている。「土地は耕作されず、航海がなので輸人品もない。手ごわな建物もなく、重いものを動かす道具もない。大地についての知識もなければ、時計もなく、技芸と文芸も社交もない。最悪なのは、暴力死への恐怖が絶えないことだ。ここでの人の一生は、孤独で、貧しく、醜く、やばんで、しかも短い。(リヴァイアサン)第二三章。

人間が「D」に努力して作り上げる生活を便利にするさまざまなものが、紛争地域でいかに無残に破壊され棄てられ、たえず次々としているかは、内戦がつづく都市を思い浮かべればよく分かる。人々はいつ殺されるかという恐怖にさらされ、しかもその状態から逃れることができない。

また、将来の見通しに基づいた生活自体が不可能になる。たとえば土地を耕作しても、その果実をいつ誰に奪われるか分からないと、生きることがその場しのぎにならざるを得ない。だから、すべての人がすべてに對して権利を持つということは、誰も何も安定して持てないのと同じ。だからこそ、人はこの状態を脱したいと考える。全くの無秩序よりは、たとえそれを抑圧的なものでもあっても、政治社会がある方がいいに決まっている。平和と安全にまぎれるものはない。それは人間が権利と自由を実現するための前提条件なのだ。

ホップズはしばしば、強い国家を求めるあまり、自由と多様性を犠牲にしたと非難されてきた。だがこの言いは、そんな考えははるかに慣れ親しんだ人間の言い草で、戦争と抗争もたらす悲惨をボウヤンとしたものなだけだ」と一蹴されたらう。

自然状態がみじめであるほど、平和への希求は強く、自明となる。それ

なのに、自然状態が最初に武器を棄てるのは危険すぎる。ここで生きながらえることを差しておいて、別の価値（たとえば英雄的勇気や自己犠牲）によって約束を交わすなほかけている。よきせぬ暴力死が最悪の結末である以上、そのリスクが高い武装放棄を最初に行う人は、ある意味では勇敢だが別の意味では愚か者にはならないのだ。

そうすると、いつまでたっても契約は結ばれず、政治社会が出てくることなどありえない。これがホププズ問題の所在である。

一方でホププズは、人間が平和のうちに共存できるためには、最低限どんなルールが必要かを考察している。これが、彼が「理性の命令」と呼ぶ自然法の内容をなす。

やっとなら法が出てきた。これで人々が自己保存の自然権を棄てる契約をすれば、政治社会で生きんだな、と思われかもしれない。でもやっとなら自然状態はそう簡単に克服できないのだ。

つまり、自然状態は戦争状態、人間の思考力が足りず、平和がいかに重要かを理解できないからつづくわけではない。そうではなく、自然状態は何が起るかわからない。それがたまたま相互不信がけないのだ。この状況さえ克服できれば、みじめで粗野な自然状態の暮らしより平和で安全な社会生活の方が、誰だってまともには考えられないに決まっている。

したがってここで問題は、「誰がどんな理由で最初に武器を棄てるのか」と言いかえられる。ここで、武装放棄を論ずる賢人が出てくれば、だんだんと仲間が増え平和が優勢になるかもしれない。もちろんホププズはそんな都合のいい想定はしない。彼は、言われるあまりうれしくないがたしかにそうだと思う。醜悪で下劣な人間性だけを当てにし、そこから秩序を作ろうとするのだ。

(1) 二重線部分①～⑥のカタカナの部分を選択し直したとき、その選択と同じ漢字を用いるものをそれぞれ一つずつ選べ。

- ① オトシイれ 10
- ア 自分のたいだいな性格が嫌になる。
- イ 地震の影響で地面がカシはつした。
- ウ ひれつなやり方を非難する。
- エ 外国でロケットがツイらした。
- ② よソク 11
- ア 野菜の成長をソクしんする。
- イ 学校のソクに従う。
- ウ 自給自足の生活をする。
- エ 身体ソクでいを行う。
- ③ ヤバん 12
- ア ヤバいのが多くの議論を獲得する。
- イ ヤバいのラーメンはおいしい。
- ウ あきヤを解体する。
- エ 論争のヤおもてに立たされる。
- ④ ボウきやく 13
- ア 犯人は国外にどうボウしたかもしれない。
- イ たボウな毎日が嫌になる。

自然状態から秩序が生まれるこの場面において、ホププズの叙述で何が起きているだろう。その部分を読むと「あれ？ レッじょうののだが、すべてが一気に変化してつじじょ」と全員が相互に武装放棄の信約を結ぶのだ。このとき同時に政治秩序のものであるヴァリアンが生成する。付け加えるなら、それなりに長さのある「ヴァリアン」の中で、自然状態から政治社会が形成されるプロセスを描いた部分は、拍子抜けするほど短い。

これはいったいどういうことだろう。「ヴァリアン」を読んでも、なぜ最初に武器を棄てる人間が出てくるかは、きちんと説明されていないのだ。そのためこの問題は、ホププズに絡めてさまざまに論じられてきた。たとえば社会学ではこの循環を「ホププズ問題」、あるいは「ダブルコンティンジェンシー」（重の不確定性）、つまり他者の行為を選択しているという、決定が困難な状況の一例と捉えられている。あるいは、「当事者が最悪の場合の結果を最ましなものにして」として全体の効用が下がる、囚人のジレンマ」状況の例とされている。

ここで例に当てはめて説明するなら、武装放棄をしなければ自分の身を守る可能性だけは残している。一方、先に武器を棄ててしまえば、相手が襲ってきたとき身を守るすべはない。だから突然襲われるという最悪の状況を想定して、武器を棄てないという選択がなされる。だがこの想定は、平和と安全のための選択を、最善であると知りながらさせないよう仕向けている。そのため悪循環が止まるさっかにはわれわたるままなのだ。（重田園江「社会契約論—ホププズ、ヒューム、ルソー、ロールズ」による）

ウ ホウねん会が盛り上がりがあった。

エ 地元を思い出してボウきやくの念にかられた。

⑤ よキ 14

ア 彼はキたい通りの仕事をした。

イ キかいたな作業で退屈した。

ウ 彼は数学の中のキか学の専門家だ。

エ 春は出会いと別れのキセツだ。

⑥ かつじょ 15

ア 物語はまだじょはんだ。

イ 彼は倫理観がけつじょしている。

ウ この本は著者のじょはつはつによる。

エ 梅雨の頃にじょしつ機を稼働させる。

(2) 傍線部aについて、ホププズが非難する気はないのはなぜか、その説明として最も適切なものを選べ。

- ア ホププズは、人間の欲望には際限がなく、他者の権利を奪うこと自体が生物として理想的な姿だと考えていたから。
- イ ホププズは、どんな人間でも欲望に従って生きる権利を放棄することが重要だと考えていたから。
- ウ ホププズは、生命を脅かす障害を避けつつ人生を充実させることを人間が願うのは、当然のことだと考えていたから。
- エ ホププズは、人間は生から死へ運動し続ける以上、その運動の力に従う行為は自然であり善であると考えていたから。

(3) 本文中のA・B・C・Dに入る語句の組み合わせとして最も適切なものを選べ。

- A 基本的 一時的 絶対的 継続的
- B 絶対的 基本的 継続的 一時的
- C 継続的 一時的 基本的 絶対的
- D 一時的 継続的 基本的 絶対的

(4) 傍線部b「自然状態」の説明として、最も適切なものを選べ。

- ア 石が下に落ちるように、人間も自然の法則に従って善悪から解放され、自然に生きることが評価される状態。
- イ 自分が生きていくために、人を騙して異にはめたり、暴行したり、殺してしまつたことが推奨される状態。
- ウ よろしくないことはよろしくなくして、社会に善悪の観念がひろがり、多くの人がこれに従って生きている状態。
- エ 生きるためには自己の判断に基づいて自分の方好きなようにならなければならないという自然法が十分に発揮されている状態。

(6) 傍線部dの理由として最も適切なものを選べ。

- ア すべての人がすべてに対して権利を持つ状況に生きる人は、果てしない欲望に取りつかれ、他人からもを奪い、命をも奪うようになってしまつたが、他人を傷つけて得る幸せは、真の幸福とはならないから。
- イ すべての人がすべてに対して権利を持つ状態では、人は、他人よりもよいものを得ようと競争に必死になってしまひ、心の安定が得られず、たいてい財産を築いたとしても、それを築しむ心はなくなつてしまつたから。
- ウ たいてい土地を耕しても作物をいつ奪われるかわからないとなるとき、人は、常に恐怖不安にさらされ、生き方がその場しのぎになって、誰も何も安定して所望できない状態になってしまつたから。
- エ 自分が自由にふるまふ権利を持つということは、他人も同様の権利を持つということであり、お互いの利害が衝突することを避けられず、衝突した場合は、上位の権威を持つ者の判断で、平等に分割されてしまつたから。

(5) 傍線部cについて、そのように言える理由として最も適切なものを選べ。

- ア すでにその消しゴムを長い期間使っているならば、所有権は移つていくことを、法律に詳しい先生であれば知っており、取つたものなのか、拾つたものなのかという論議に終始することなく、正しい判断ができるから。
- イ 消しゴムを取つたと言われた子と、取られたと言つた子によって、双方の言い分を十分に聞いて公正な裁断を行うことにより、どちらかが泣き寝入りしなければならぬような不平等を是正することができるから。
- ウ 消しゴムが、取られたののか、拾われたののかは、双方の言い分から判断できることはなく、先生が仲介して双方が納得するまで話し合うことで解決することができるから。
- エ どちらかが暴力を使って消しゴムを手に入れるなど、消しゴムを取つたとされる方法で、取られたとされる方法の間で結論が決められるのではなく、上位に立つ人の判断によって結論づけられることとなつたから。

(8) 傍線部fについて、「克服できない」理由として最も適切なものを選べ。

- ア 何をしてもよいという状況に利益を見いだす人も必ず出てくるから。
- イ 何が起るか分からないという状態がもたらす相互不信があるから。
- ウ 人間は愚かで、平和がよいと思ながらもそこに進むことができないから。
- エ 人間の本性は、他者を傷つけることを好む醜悪で下劣なものだから。

(9) 傍線部gの説明として最も適切なものを選べ。

- ア 相手が武装を解除すれば、自分も武装を解除するが、相手が武装を解除するかどうかは、自分が武装を解除するかどうかにかつており、結局武装解除の決定ができないという状況が武裝解除することになり、長年武装をしてきたために、相手も自分も武装することの利益によく馴染んでおり、いざとなると武装解除に踏み出せない状況で、武装解除が最善の策であることにかつていないのに、ずっと武装という不自由のなかで生きてきたために、自由に対して恐れを抱くようになり、武装を解除できなくなつていく状況で、自分が武装解除するかどうかを、相手の判断に委ねてしまつたことにより、武装を解除できなくなつており、本来は誰にとつても望ましいはずの武装解除が進まない状況

指定校制推薦入学制度 総合型選抜入試

公募制推薦入試(前期) 「併願制」・「専願制」

公募制推薦入試(後期) 「専願制」

一般入試「第1期」

一般入試「第2期」

国語

- (10) 本文の内容に合致するものを一つ選べ。 [24]
- ア ホッブズは、自然状態における人間は、いつ殺されるか、いつ奪われるかという恐怖にさらされ、安定的に財産を築くことができないことを述べ、人類にとって武装解除がいかに大切かを説明したが、その説明は難解すぎて多くの人々には届かず、いまだ武装解除には至っていない。
- イ ホッブズは、人間が己の欲望のままに生き、他者の権限をも奪う状態を自然状態と呼び、それぞれが自己保存の自然権を放棄することによってそこから脱却して政治社会が形成されると論じたが、どのようにしてその放棄が行われるのか、その過程を詳細に説明することはなかった。
- ウ ホッブズは、人間が生きたために、自己の判断でしようと決めたことをする自由を自然権と名づけ、各人が他者の干渉を受けることなく、適切に自然権を使用することが、「万人の万人に対する闘争」と呼ばれる自然状態を脱却して、政治社会を誕生させるために重要であるとした。
- エ ホッブズの「リヴァイヤサン」において、自然状態から政治社会が形成されるプロセスを描いた部分は抜き抜けるほど短く、各人の自然権の放棄の過程は記述されていないもの、その前提たる自然状態についての説明が十分ではないため、そこを讀んだ読者は「あれ？」とまどってしまう。

2026年2月27日実施

2026年度

国語

(時間…………… 60分)
(配点……………100点)

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
- 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、と表示のある問いに対してウと解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄のウにマークしなさい。
(例)

解 答 欄									
解答番号	10	9	8	7	6	5	4	3	2
	○	○	●	○	○	○	○	○	○

- 解答を始める前に、解答用紙の座席番号欄に座席番号を記入し、マークしなさい。また、氏名も書きなさい。解答科目欄には解答する科目をマークしなさい(解答科目欄のマークを間違えた場合、0点となるのでよく確かめてマークすること)。

- 1 次の設問に答えよ。解答は、解答用紙にマークすること。
- (1) 空欄 を補うのに適切なものをそれぞれ一つ選べ。
 ① 自業自
 ア 読 イ 徳 ウ 特 エ 得
- ② 大義名
 ア 問 イ 文 ウ 分 エ 償
- (2) 傍線部のカタカナを漢字に直したときの部首を一つ選べ。
 病がカイ方に向かう。
 ア こざとへん
 ウ もんがまえ
- (3) 「開巻」と熟語の組み立てが同じものを一つ選べ。
 ア 執筆 イ 自他 ウ 獲得 エ 傍線
- (4) 訓読み+音読みの読み方をする熟語を一つ選べ。
 ア 楽屋 イ 場面 ウ 水玉 エ 著書
- (5) 「二寸の虫にも五分の魂」の意味としてもっとも適切なものを選べ。
 ア どんなにちっぽけな者にもそれなりの意地があるということ
 イ どんな生き物でも短い寿命を懸命に生きているということ
 ウ どんな少数の意見でも耳を傾けるべきだということ
 エ どんなに痛がられる存在でも何か弱みはあるということ
- (6) 「やぶさかでない」の意味としてもっとも適切なものを選べ。
 ア どうにもできなくて動けないこと
 イ そわそわしてじっとしていられないこと
 ウ あることをおこなう努力を惜しまないこと
 エ ひどすぎて取り扱えないこと
- (7) 傍線部の中で種類が異なるものを一つ選べ。
 ア 人間は考える輩である。
 イ 吾輩は猫である。
 ウ 美しい絵画である。
 エ 子どもたちが泳いでいる。
- (8) 三島由紀夫の作品でないものを一つ選べ。
 ア 仮面の告白 イ 斜陽 ウ 潮騒 エ 金閣寺

※国語(2月26日実施)の問題は、103ページから始まります。

2 次の文章を読んで後の設問に答よ。解答は、解答题用紙にマークする。

実際の所、人文社会系と理工系系との程度違つたのでしょうか。改めてその点を確認してみたいと思います。

一九五九年に書かれたスノウの「二つの文化と科学革命」では「科学的文化」と「人文的文化」の隔絶、および両者のいがみ合いが述べられています。スノウが語っていたのは、実質的には物理学（とりわけ物理学）と文学（特に英文学）の関係を観察しての経験談です。そこでは、特に正反対の特徴が取り上げられ、どれだけ両者が隔たっているかが強調されています。

スノウのよりの二分法の議論に絶大な影響を与えてきたのは、ヴァインバントおよびリットケルトの分類です。彼らは個別的事象を扱ったための個性記述的 (idiosyncratic) な「精神の字」と、普通一般的知識を指す法則記述的 (nomothetic) な「自然の字」という二つのカテゴリーを想定しました。そして、多くの人が前者に人文社会系諸語を、後者に理工系語をあてはめたのです。ヴァインバントらは特にそう決めつけてはいなかったのです。

ところで、諸分野の対象や方法という観点から見ると、「人文社会」系諸分野と「理工系」系諸分野の間にはさほどつきりや線を引くこととはできないという指摘もありません。以下ではその点について、複雑になりすぎない範囲で確認してみたいと思います。

まず、自然科学が常に「法則記述的」、すなわち普遍的な法則を見いだすための学問かどうかを考えてみましょう。一見したところ、ニュートンの平均気温を確率的な精度で導き出す、といった具合の探求が増えているのです。

このように、詳しく見ていくと自然科学も一枚岩ではありません。普通の法則を見つけるだけではなく、統計的に高い蓋然性 (D) を持ち、説明力のある理論やモデルを見つける営みも重要であるからです。その意味で、「法則記述的」とまでは言い切れない要素があります。

この方向で考えを進めていくと、極まれに問いが頭をたたくこともできます。それは、ひょっとしたら私たちが「自然科学」と捉えているものが、実は全く統一性のない、バラバラのものではないか、単に歴史的な偶然により一つのカテゴリーにまとめられているだけではないか、という疑いです。

これを「自然科学の多元論」と呼びました。実は一九世紀の間にも同様の疑いはありました。電氣研究と磁気研究、物理と化学などが果たした二つの「自然科学」といえるのか定かでない時代があったからです。しかし二〇世紀初頭にはひとまず、あらゆる自然現象が究極的には物理学に還元可能だとの見方が優勢になりました。

しかし、二〇世紀末から生物学、およびそれを基盤とした総合的な生物学としての生命科学が大いに発展したことで、自然科学の多元論が再び活気づきました。進化論の問題からゲノム研究に至るまで、生命科学は物理学に還元できる諸語とは異なる、との見解が出てきたからです。文学、物理学以前の問題として、自然科学は一つか、複数であるのか問うこともできるのです。

同時に面白いのは、仮に「自然科学は多元的」であるとしたら、人文社会科学との差は、層層縮まるのではないかと主張も成立しつづけます。すなわち、逆説的にも、「自然科学の多元論」は、「文学・理系をふくむ、バ

のパンの引力の法則、熱力学の基本法則などが思い浮かび、シグマ(Σ)が当然だと感じるかもしれません。

実験観察を重ねる法則についての仮説を作り、その予測を更なる実験観察によって検証し、証明する。個人の試行は、実験器具の状態や、その日の気温などの条件に左右されるけれど、回を重ねることで、(A)な要素を取り除き、現象の中の(B)な要素を取り出されていく。このような仮説検証による法則の発見は、一般的に、自然科学の営みのちゆ(ちゆ)とみなされています。

しかし、全ての自然科学の諸分野がこの図式に当てはまるわけではありません。(C)なのは、生物学におけるダーウインの進化論です。自然選択というプロセスで人間をはじめとする動物が今の姿に進化したことは、同じような方法で検証して証明できた「法則」としてはいえません。

地球をもつて創つて、数十億年のプロセスを経て同じ現象を再現してみることが事実上不可能です。

しかし、だからといって「進化論が自然科学でない」という話にはなりません。動物や植物、あるいは微生物など、他の生物を用いた事例で、短期間の出来事としては、進化のようなプロセスが高い精度で再現されているからです。また、たとえば直接に地球上の生物の進化プロセスを再現できないことも、進化論を想定した方が説明しやすいことは沢山あります。

他の分野であっても、一般的にいつて対象が複雑になればなるほど、普遍性の追求よりは、局所的な現象の記述が意味を持つようになります。研究から導かれる推論も確率的になります。地球科学や気象学はそのコウ(こう)れい(れい)でしょう。局所的な現象A(たとえば地中から出てきた数万年前の氷に含まれる二酸化炭素の量)から、局所的な現象B(数万年前の地球

ラバラの諸語がゆるくつながって一つである」とする「科学の(ゆるい)一元論」と相性がよいのです。この問題は今でもはつきりとは答えが出ていません。

人文社会科学は、ばつ(ばつ)つき(つき)がもつ(もつ)と(と)ンチ(ンチ)です。全てが個別な事象を扱う分野、すなわち「個性記述的」ではないのは(E)です。それどころか、一回りりの現象を扱う歴史学や、個々人の解釈を重視する文学や哲学のような分野の方が稀な例といえるくらいです(しかも哲学の一部は近年自然科学や数学、論理学に接近しています)。

これら「個性記述的」な分野は、人間の日常的な経験の多様性を記述することや、ある視点から対象を解釈することを重視してきました。もちろん、歴史研究の場合でも、物的な証拠を検証することはあります。統計的手法の時には使いますが、そこから法則を導くのではなく、一回だけの出来事や人間性について何かを解釈し、語るものが目的となります。

人文科学と社会科学の境目は曖昧です。言語により遠いものもあります。日本の場合、文学、歴史、哲学などは基本的に人文科学(あるいは人文学)とみなされますが、歴史学を社会科学とみなすこともあります。また、地理学や心理学、人類学など、人文科学、社会科学にまたがるばかりでなく、自然科学の領域にまで関連分野が存在する例もあります。

間違いない社会科学とみなされるのは、経済学、社会学、政治学、法学などでしょう。

社会科学においては、大半の分野が、文学や歴史のような「人文」科学と普遍性を追求する自然科学的な諸語との中間に位置しています。特に、経済学の大半の領域、計量的手法を使う社会学、政治学の一部などは、形式化と定量化、すなわち、現実の生活からの抽象により一般理論やモデル

を考えて、次に標準化されたデータを使って理論をテストするという方法を取ります。人間社会の現象を数学的・形式的構造により表現しようとするこのような努力は、経済学、社会学においてはむしろ古典的であり、一九世紀から継続して続けられてきました。

その一方で、社会科学には個性記述的、すなわち人文系と同様に歴史検証や、事例の解釈を重視する方法も根を下ろしています。定量的な調査を行うに当たっても、社会的な対象を構成する枠組みや単位については、人の価値観や意識が作り上げる部分も大きいからです。市場とは何か、社会とは何か、「政治」とは何か、など時々立ち止まって、哲学的に解釈する業(わざ)が欠かれません。

とりわけ一九七〇年代以降は、それまで主流であった「実証主義」的な方法論の批判から、「解釈主義」など、個性記述的な方法論を支持する学派が、人類学、社会学、政治学などで活気づき、「大勢力を作り出した」(言語論的転回)とも呼ばれる。そのような経緯ゆえ、社会科学内部の多様性は増えています。

実証主義 (empiricism) においては、自然科学とは同じように、社会現象は研究者の意図にかかわらず事実として存在すると捉えられます。そして研究者は、研究対象を客観的な立場から、価値中立的に捉えられたいという仮定のもとで調査を行います(たとえば、ケシシアルハラスメントの体験について女性にインタビューする場合でも、調査者は、性別・年齢にかかわらず、適切な訓練さえあれば必要なデータが取れるとの仮定に立ちます)。

対して、解釈主義 (interpretivism) では、はその逆の考え方を取ります。すなわち、世の中の社会現象は、我々の知識や解釈と独立には存在

しておらず、認識し解釈することが事実を作り上げていくとみなすのです。そのため、自然科学的な中立性で人間社会を捉えることはできないの理解がなされます。セクハラや体罰について女性にインタビューするとえただ、調査者の性別・年齢が回答に影響を及ぼすことを避けられないとの仮定に立つのです。そして、数値的データには出てこない人々の解釈や信念について、インタビューや言説分析などを通じて理解を深める手法が重視されます。

このように、社会科学においては、「理系」的な形式化・定量化と、文系の個性記述的(あるいは定性的)方法論とが長きにわたりキョウ(きょう)ぞ(ぞ)ん(ん)する状況があるのです。

更には、それに加えて一九七〇年代には、生物学の一部として人間社会を扱えるのではないかと、いう社会科学の「生物学化」としての自然科学の見方が出てきていると書きました。人文社会科学はもとから多元性を持つわけですが、このことをどう捉えるかによって、「人文」と「社会」をより一層わけて考える立場もあれば、むしろそれだからこそ「多様なものゆるい統一」を重視する考え方も存在しています。

(隠岐や香「文系」理系はなぜ分かれたのか)による) 先に、近年は生命科学の独特さが目され、自然科学においても多元論的な見方が出てきていると書きました。人文社会科学はもとから多元性を持つわけですが、このことをどう捉えるかによって、「人文」と「社会」をより一層わけて考える立場もあれば、むしろそれだからこそ「多様なものゆるい統一」を重視する考え方も存在しています。

(1) 二重傍線部①②③のカタカナの部分を選択し直したとき、その漢字と同じ漢字を用いるものをそれぞれ一つずつ選べ。

- ① パン(う) **10**
- ア インターネットではパンを調べたうえで購入した。
- イ この調査はパン(う)に代わって世間から認められた。
- ウ 建物を建てる際にはパン(う)の調査が必要だ。
- エ パン(う)の体制を期して試合に臨む。
- ② シ(い) **11**
- ア 飛行機のチケットをシ(い)キョウ(きょう)手配する。
- イ 彼は芸術家のシ(い)キョウ(きょう)を持つ。
- ウ 来週から工場のシ(い)キョウ(きょう)が始まる。
- エ 論文のシ(い)キョウ(きょう)を五百字にまとめる。
- ③ ち(う)カ **12**
- ア 公民館の跡地は小さくカ(か)に分けられた。
- イ 検察は被告の有罪のカ(か)し(し)ょう(しょう)をつかんでいる。
- ウ 問題のカ(か)し(し)ん(しん)を指摘する。
- エ 京都にはたくさん美しい神社がカ(か)が残されている。
- ④ コ(う)れ **13**
- ア 作業のコ(う)り(り)つ(つ)化のため、役割を分担した。
- イ 姉が勤める会社は福利コ(う)せ(せい)いが充実している。
- ウ 彼はコ(う)お(お)の感情がわかりやすい。
- エ 公開コ(う)ざ(ざ)で多くの知識に触れることができた。
- ⑤ ク(ん)ち **14**
- ア 才色ク(ん)びの彼女は多くの人から憧れられている。
- イ 彼は自己ク(ん)び(び)が欲(よ)く(く)も(も)強い。
- ウ リスクを避けたク(ん)じ(じ)な投資を心がける。
- エ 彼女は日本美術のク(ん)い(い)として評価されている。
- ⑥ キ(ョウ)ソ(ン) **15**
- ア 隣の家の木の枝がキ(ョウ)ソ(ン)キョウ(きょう)している。
- イ ドラムの音に怒がキ(ョウ)ソ(ン)キョウ(きょう)している。
- ウ 彼女は心理学にキ(ョウ)ソ(ン)キョウ(きょう)がある。
- エ 二国間新たな貿易キ(ョウ)ソ(ン)キョウ(きょう)が結ばれた。

指定校制推薦入学制度 総合型選抜入試

公募制推薦入試(前期) 「併願制」・「専願制」

公募制推薦入試(後期) 「専願制」

一般入試「第1期」

一般入試「第2期」

国語

(2) 傍線部aについて述べたものとして、もっとも適切なものを選び。

ア ヴィンデルバントとリッケルトが想定したのは、個別的事象を重視する「精神の学」としての個性記述的な学問と、実験によって得られた結果を、それぞれの視点から解釈することを重視する法則定立的な学問である。

イ ヴィンデルバントとリッケルトが想定したのは、ある視点から対象を解釈することを重視する個性記述的な学問と、実験を重ねる中でたまたま起こる要素を取り除き、現象の中の一般的な要素を抽出しようとする法則定立的な学問である。

ウ ヴィンデルバントとリッケルトが想定したのは、実験・観察を行って仮説を立て、更にその仮説を証明する実験・観察を重ねる個性記述的な学問と、人間の日常的な経験の多様性を観察することで法則性を発見する法則定立的な学問である。

エ ヴィンデルバントとリッケルトが想定したのは、実験により証明された事実のような解釈を加えるかを重視する個性記述的な学問と、日常的経験から標準化可能な理論を導き出して、法則化する法則定立的な学問である。

(3) 本文中の「A」・「B」・「C」に入る語の組み合わせとして、もっとも適切なものを選び。

ア 偶発的 普遍的 典型的
イ 具体的 抽象的 独創的
ウ 例外的 一般的 意識的
エ 必然的 相乗的 実質的

(4) 傍線部bの理由として、もっとも適切なものを選び。

ア 動物の具体的な進化のプロセスは再現できなくても、自然科学の多元論を想定した方が説明できることは汎出があるから。
イ 動物の進化の検証のために地球をもう一つ創って、数億年間のプロセスを経て同じ現象を再現することはできないから。
ウ 人間をはじめとする動物が今の姿に進化したことについて、自然選択というプロセスを検証して証明することはできないから。
エ 法則とまでは呼べないが、局所的な出来事としては進化のような過程が高い確率で再現できているから。

(5) 傍線部cの説明として、もっとも適切なものを選び。

ア 電気研究と磁気研究、物理と化学など、多様な学問が果たして一つの「自然科学」といえるのかという疑いを排し、あらゆる自然現象が究極的には物理学に還元できるとする考え方を詳しく見ていく自然科学にもいろいろあり、これからの「自然科学」には法則の発見だけでなく、説得力のある理論やモデルを見つけるという柔軟性も必要であるという問題提起
ウ 一回きりの現象を扱う歴史学や、物理学に還元できる諸とは異なる進化論やゲノム研究など、文系・理系をふくめ、バラバラの諸学がゆるやかにつながっていくとする新たな理論
エ これまでひとまとまりのものとして捉えられてきた「自然科学」の諸学が、実は歴史の経緯から偶然に一つの範疇にまとめられた統一性のないものだったのではないかと問い

(6) 本文中の「D」に入る語として、もっとも適切なものを選び。

ア 確からしさ イ 複雑さ
ウ ぬすらしさ エ 自然さ

(7) 本文中の「E」に入る語として、もっとも適切なものを選び。

ア 独断専行 イ 本末転倒
ウ 一目瞭然 エ 半信半疑

(8) 傍線部dの方法について、説明として、もっとも適切なものを選び。

ア 歴史研究は、一回きりの現象を研究対象とする学問であるが、個別の事柄についての検証であっても客観的に証明することは必要であり、そのためには、物的証拠の提示や計量的な手法が不可欠である。
イ 歴史研究でも、物的な証拠は重視され、統計学的な方法論も用いられるが、歴史研究におけるそれらの検証は、法則を導くためではなく、一回性の出来事や人間性を解釈して語ることを目的としている。
ウ 歴史研究では、世界各地の人類の歴史に共通する普遍的な法則を導き出すことを目的としており、それゆえ多くの物的証拠を統計的に分析した上で、より詳細な個別の解釈を加えることが重視されてきた。
エ 歴史研究は、その根底において個別の事柄を形式化・定量化するという自然科学と共通する性格を持つが、この性格により一回きりの個別の事象を対象としつつも、普遍的な法則を導き出すことが可能になる。

(9) 傍線部eについて、「実証主義」と「解釈主義」についての説明として適切なものを選び。

ア 実証主義ではインタビューの際、性別・年齢にかかわらず、適切な訓練を受けなければならないデータが取れるとの仮定に立つが、解釈主義では調査者の性別・年齢が回答に影響を及ぼすことは避けられないとの仮定に立っている。
イ 実証主義では社会現象は、研究者の意図にかかわらず事実として実在すると捉えるが、解釈主義では世の中の社会現象は、我々の知識や解釈から独立して存在してはおらず、認識し解釈することが事実を作り上げていくとみなす。
ウ 実証主義では研究対象を客観的な立場から、価値中立的に捉えられるという仮定のもとで調査を行うが、解釈主義では自然科学的な中立性で人間社会を捉えるとはできないと理解されている。
エ 実証主義では調査対象の基盤となる「市場」や「社会」といった社会的単位と人々の意識との関係を重視して、これを分析対象とするが、解釈主義では言説分析を通じて数量的データには出てこない解釈や信念の分析について理解を深める。

(10) 本文の内容に合致しないものを選び。

ア スノウの「二つの文化と科学革命」は「科学的文化」と「人文的文化」の関係についての著書だが、その中でスノウは理学と文学の研究者を隔した上で、両者の間には、はっきりと線を引くことはできないと述べている。
イ 二〇世紀末から生物学や物理学を基盤に置いた総合的な学問としての生命科学が大いに発展したことで自然科学の多元論が再び注目され、生命科学は物理学に還元できる諸学とは異なるとする考え方が出てきた。
ウ 社会科学においては、定量的な調査を実施する場面に事例の解釈を重視する方法も根づいており、時には立ち止まって「市場」とは何か、「社会」とは何か、「政治」とは何かについて哲学的に解釈する作業が必要である。
エ 社会科学については、文系的な個性記述的な方法論と理系的な形式化・定量化といった方法論が共存する状況であるのに加えて、生物学の一部として人間社会を捉えるのではないかと「社会科学の「物学化」といった考え方も現れた。

※国語(2月27日実施)の問題は、101ページから始まります。